

巻 頭 言

次期 IMU 総裁，京都大学数理解析研究所

森 重文

数学者の間では，4 年毎に開催される国際数学会議（ICM）はよく知られていると思うが，その運営母体である国際数学連合（IMU）はそれほど知られていないのではないだろうか．ICM は 1897 年に始まったが，運営母体の組織を持たない運営は困難だったと思われる．IMU は 1920 年に設立されたが，1932 年に解散し 1950 年に再設立されるなどの紆余曲折を経て，1952 年に現在の組織の原型が整った．政治とは無関係に思われる数学の ICM や IMU だが，第 1 次・第 2 次世界大戦や 1982 年のポーランドでの政治的混乱の影響などを受けている．その定款に明らかに謳ってはいないものの，IMU は政治の影響を排除するためにあらゆる努力をするという立場である．

その IMU の Daubechies 総裁から，昨年終わり頃に私に IMU 次期総裁候補の内々の打診があり，メールによるやりとりを経てスカイプによる面談が行われた．今年になって IMU 理事会で内定し 5 月に公表され，今年 8 月のソウル ICM の直前に開催された IMU 総会で正式に決定された．任期は 2015 年 1 月からの 4 年間だが，その次の 4 年間も前総裁というポストで理事会に残ることになる．

私は 1995 年から 4 年間は理事として，続く 1999 年から 4 年間は副総裁として IMU に関与していた．だから IMU の基本的なことは理解しているし，良い経験だったが，12 年も前のことで，正直言って，IMU の仕事は卒業したつもりでいた．では何故今回引き受けたのか．

この 3 月まで，所属する数理解析研究所の所長を 3 年間務めた．有能な事務陣にも恵まれ同僚の協力も得て，所長職を全うすることができたことに感謝している．数学者というのは 1 人が基本の仕事なので組織というものあまり関心がなく，所長職は敬遠してきた．しかしやってみて，大変だが重要で意義のある仕事だと遅ればせながら理解した．所長は数理研のための仕事だが，IMU 総裁は世界の数学のための仕事だ．またアジアから初の総裁でもあり，必要とされるのならば，努力してみるべきだと考えたので引き受けた．

IMU の活動を紹介しよう．

IMU の目的は数学の発展・振興と謳われている．中でも次回 ICM 開催が重要な仕事だ．開催地はリオデジャネイロなので，既に現地組織委員長と連絡を取り合い，4 年後に向けて準備を始めている．その他に重要なトピックをあげると，今回の ICM2014 では初の女性総裁や初の女性フィールズ賞受賞者など女性の躍進が際立ったが，一過性の出来事にさせないために，数学における女性の委員会を立ち上げることになった．また，

フィールズ賞・ネバンリンナ賞受賞者の中にイラン、インド、ブラジル出身の数学者がいたことに象徴されるように、近年、発展途上国での数学の隆盛には目を見張るものがある。IMUとしてはそれらの国で数学者団体が組織されIMUと連携していけるように是非手助けしたいと考えている。

IMUは様々な賞を授与しており、その関与の仕方も多様である。

フィールズ賞、ネバンリンナ賞の2つは40才までの賞としてよく知られている。その他に、ガウス賞は他分野への応用を顕彰する目的でドイツ数学連合とIMUにより設立され、伊藤清先生が第1回受賞者として2006年に受賞されたことは記憶に新しい。チャーレン賞は生涯にわたって数学に卓越した学術的貢献をした人を顕彰する目的でチャーレンメダル財団とIMUにより設立された。リーラバティ賞は、ICM2014からInfosys社の後援を受け、数学のアウトリーチ活動に多大な貢献をした人を顕彰する。これらには、その趣旨に照らして年齢制限がない。賞とは異なるが、ICMエミー・ネーター講演は生涯にわたって重要な業績を挙げた女性数学者を顕彰するためのものだ。

以前に私が関与したICM2002ではフィールズ賞とネバンリンナ賞の授与のみであったから今回のICMでは賞の多様さが印象的だ。しかも、各賞の特性に合わせた紹介を行っており、多様性を尊重していきたいというIMUの姿勢を感じる。

さらに、地球的規模で数学学術誌(書)のデジタル化を目指すGDMLも急務となっているが、著作権やビジネスが絡み、慎重な取り扱いが欠かせない。他にも様々なトピックがあり、それらに対応することを期待されている。

IMU理事会の活動の仕方に触れたい。

2010年にIMUのほぼ恒久的な事務局が初めて組織されベルリンに設置された。今年まではGrötschel事務局長が偶々ベルリン在住であり、日常的に連絡を取っていたが、2015年からはノルウェーのHolden教授が事務局長として頻繁に事務局を訪れて連絡を取ることになる。彼と私とはメールやスカイプなどを使っての連絡となるし、理事会のメンバー11人(総裁1人、事務局長1人、副総裁2人、理事6人、前総裁1人)も世界中に散らばっておりメールで連絡を取り合う。各々が仕事を分担し、理事会メンバー全員が実際に集まるのは年1回で場所は時々により変わる。このようにIMU理事会は協力し合って文字通りグローバルな活動をしている。私は日本に常駐し、関連業務のため頻繁に世界各地に出張することになる。

数理研の所長がそうであったように、総裁も独りで仕事を行えるものではない。多くの人々とのネットワークを築き、その協力を得ながら課題に対処していくのを楽しみにしている。